

新教育課程における東北大学の入試と教育接続⁽¹⁾

－主に情報・理科，および，入試広報の観点から－

倉元 直樹^{1)*}

1) 東北大学高等教育開発推進センター

問題と目的

かつて，高校⁽²⁾と大学のつながりは入試の一点のみで，しかも単純な枠組で考えられてきた。長い間続いてきたそのような時代から，状況は大きく変貌を遂げている。いまや，高校と大学は様々な高大連携活動を通じて，強く，複雑に結びついている。大学入試の機能も，定員で定められる閾値に基づき，入試得点で順序付けられた受験生を「合格」，「不合格」に分類するだけに限定されない教育的役割がある。高校教育の現場では，至極当たり前と受け取られてきたことだが，少しずつ大学側にも理解されるようになってきた。

今，大学はあらゆる機会を通じて自らの姿を受験生に伝えようとしている。また，近い将来大学生となる高校生は，進むべき道を見出すために，氾濫する大学情報から生きた情報をより分けようと懸命である。そして，大学入試にはそれらの進路探求活動の総仕上げの意味が付加されている。

高校側から見ると，大学入試とは大学からの究極のメッセージである。「大学の考える『アドミッション・ポリシー』とは，大学の目標，役割，建学の精神，求める学生像等のことばによる表明であろう。しかし，高校側は入試の内容自体を真のアドミッション・ポリシーとして受け止める傾向が強い⁴⁾」のである。すなわち，いったん進路を定めたとき，大学入試そのものに表現される「大学が求める学生像」に向かって，受験生は自らを陶冶しようと試み，高校教員はそれをサポートすることになる。

一方，高校と大学の結びつきは，上述のような「高大連携活動」に止まるわけではない。何をどの程度ま

で教育するのかという内容の観点からの結びつき，「高校と大学の教育接続 (articulation)」は，より重要である。

一部の例外を除き，東北大学ではほとんどの学部学生を国内の高校の大学進学志望者から迎えている。そのような状況で大学から高校を眺めたとき，高校教育は学生に教育を施すための準備段階である。高校の教育内容は，大学入試のあり方を規定している。そして，その出来如何が大学入学後の教育達成に決定的な影響をもたらす。さらに，初等中等教育の教育課程が文部科学省の定める学習指導要領で規定されている以上，高校の学習指導要領は大学入試を規定し，最終的に大学教育そのものを規定することになる。逆に，大学入試の具体的なあり方は，高校の教育活動を誘導することになる。

政策的にはその事実は一貫して「高校教育を乱す」ものとして捉えられてきた³⁾。しかし，実際には，それは正負両面の「遡及効果 (washback effect, backwash effect)」の一面に過ぎない。「現実問題として，大学入試問題は大学入学適格者の評価，選抜のツールであるとともに，進学校を中心とした高校教育の暫定的到達目標であり，教材でもある」のであり，「大学入試の崩壊は我が国の教育システムの崩壊に直結する」とさえ考えられる⁴⁾。

しかし，高等教育が「ユニバーサル段階」⁶⁾に達しようとする現状では，入試の影響力をかつてと同じように考えるべきか，疑問を感じざるを得ない。高大連携活動が活発化し，入試が多様化している現状において，東北大学の入試が高校にどの程度の影響力を持つ

*) 連絡先：980-8576 宮城県仙台市青葉区川内28 東北大学高等教育開発推進センター高等教育開発部入試開発室

ているのか直接示す材料はない。

本研究では、3つの視点から東北大学と高校の連携関係、その一環の入試を定量的に捉えることを試みる。

第1の視点は「新教育課程における高校教育」である。平成11(1999)年告示、平成15(2003)年施行の高等学校学習指導要領(新教育課程)の下、大きな変更点に対して高校がどう対処しているか、分析する。変化が目立つのは「理科」であり、新しい教科「情報」や「総合的な学習の時間」の導入と言える。

第2の視点は、東北大学の入試の影響力である。大学全体、また、各学部の入試は高校教育にどの程度の影響を与え、どのように受け取られているのか、定量的評価を試みる。

第3の視点は高大連携活動の一環としての入試広報の浸透力である。東北大学の広報活動は社会的に高く評価され⁽³⁾、既に一定の評価が得られているが、どの程度高校に行き渡っているのか、定量的な検討を行う。

1. 学習指導要領改訂の経緯⁽⁴⁾

最初に、戦後における学習指導要領改訂の経緯について簡単に触れておく。

昭和23(1948)年度に学習指導要領が導入されて以来、概ね約10年ごとに改訂が重ねられ、平成15(2003)年施行(小・中学校は平成14[2002]年度)の学習指導要領は8回目のものになる。以下、主に「学制百二十年史⁹⁾」から、ポイントについて概説する。

昭和23(1948)年度に発足した新制高校では、「生徒の個性に応じた学習」の可能性を求め、大幅な教科選択制と単位制が採用された。最初の改訂は昭和26(1951)年度である。昭和31(1956)年度の改訂では、高等学校教育により計画性を持たせるため、必修教科・科目を増加して教養の偏りを少なくすることを趣旨としたものであった。これ以後、告示から施行まで3～5年の年数を要することになる。なお、本稿の記述は施行年度に基づく。

昭和38(1963)年度の改訂は小・中・高校にわたる教育課程の一貫性を持たせ、科学教育の充実を狙ったものであった。昭和48(1973)年度の改訂では、約90%の高校進学率を踏まえた改訂である。必修科目が大幅に削減され、「数学一般」、「基礎理科」等の科目

が新設された。昭和57(1982)年度の改訂では「ゆとりと充実」というキャッチフレーズが有名になった。各教科の指導内容が大幅に削られ、思い切った授業時数の削減が行われた。このときから高校の卒業履修単位も85単位から80単位へと減じられた。平成6(1994)年度施行の学習指導要領は、「生きる力」、「新学力観」というキャッチフレーズで知られている。教育課程の一層の弾力化が図られ、社会科が再編成されて地理歴史科と公民科に分けられた。

平成15(2003)年度施行の新教育課程は、いわゆる「3割削減」で知られる。完全週休2日制導入を前提に卒業履修単位は74単位にまで減らされた⁽⁵⁾。それに加えて「総合的な学習の時間」、および、新教科「情報」が導入されたのが特徴である。

2. 新教育課程における変更点

本節では、学習指導要領の主な変更点について簡単に触れる。

2. 1. 授業時間

平成6(1994)年度施行の学習指導要領では、「授業の1単位時間は50分を標準とし、教科・科目の特質等に依じて、授業の実施形態を工夫することができる」となっていた⁽¹¹⁾。新しい指導要領では、「(略)それぞれの授業の1単位時間は、各学校において、各教科・科目等の授業時間数を確保しつつ、生徒の実態及び各教科・科目等の特質を考慮して適切に定めるものとする」とある⁽¹²⁾。すなわち、1コマの授業時間に関しては学校の自由裁量で決められることになったのである。ただし、「1単位時間を50分とし、35単位時間の授業を1単位として計算することを標準」とすることは変わらない⁽¹³⁾。

2. 2. 総合的な学習の時間

「総合的な学習の時間」は、今回初めて設けられた。「卒業までに105～210単位時間を標準とする⁽¹²⁾」とされ、3～6単位分に当たる。卒業単位に含まれるため、必修の内容である⁽¹³⁾。

新学習指導要領の総則には、「第4款 総合的な学習の時間」に6項目を当てている。要約すると、「横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動」、「主体性、問題

解決能力を育てる」,「体験学習, 実験・研究等を積極的に取り入れ, 多様な学習形態を取る」といったことが挙げられる¹²⁾. 自由度が大きいと同時に, 実施に多大な労力を必要とする内容である.

2. 3. 情報

「情報」は, 中央教育審議会答申¹⁴⁾, 教育課程審議会答申¹⁵⁾を踏まえて導入された新教科である¹⁶⁾. 「情報A」, 「情報B」, 「情報C」の3科目から一つ(2単位)を選択する.

「情報A」はコンピュータや情報通信ネットワークの活用等, 「情報B」は情報処理技術等, 「情報C」は情報化社会における規範等を中心に学ぶ.

2. 4. 理科の選択単元

卒業総単位数削減の中, 「総合的な学習の時間」, 「情報」の新設により, 高等学校のカリキュラム編成は相当に厳しい状況に置かれている. 理科は, その中で大きく改変された.

まず, 必修選択の体系が大きく変わった. 以前は, 「総合理科」, 物化生地の「IA」, または, 「IB」から2区分にわたって2科目⁶⁾であった¹¹⁾が, 「理科基礎」, 「理科総合A」, 「理科総合B」から1科目以上を含む2科目選択となった. 「理科基礎」は全分野の入門, 「理科総合A」は物理・化学分野, 「理科総合B」は生物・地学分野を学ぶ科目である¹²⁾.

さらに, 今回, 「物理Ⅱ」, 「化学Ⅱ」, 「生物Ⅱ」, 「地学Ⅱ」に選択単元が設けられた. 「物理Ⅱ」では「物質と原子」, 「原子と原子核」の一方, 「化学Ⅱ」では「生活と物質」, 「生命と物質」の一方, 「生物Ⅱ」では「生物の分類と進化」, 「生物の集団」の一方, 「地学Ⅱ」では「地球の探求」, 「地球表層の探求」, 「宇宙の探求」から2つを選択して履修させることが出来る¹²⁾.

方法

1. 調査の経緯と方針

調査は, 平成15(2003)年度育研究共同プロジェクト経費(東北大学総長裁量経費)が採択され, 急遽計画された. 高等学校が多忙を極める時期の緊急調査であるため, 質問項目を最低限に絞り込んだ.

2. 調査票

調査票は記入の便宜を最大限に考慮し, A4判2枚に質問項目を収めた. 1枚目は新教育課程に関する質問項目である. 最初に学校名の記入を求めた. 「1コマあたりの授業時間」, 「総合的な学習の時間」, 「情報」, 「理科」に関する質問, および, 新指導要領の下で心配している事項から成る.

2枚目は東北大学の入試と広報活動に関する項目である. 「東北大学の入試の影響」, 「各学部⁷⁾の入試に対する評価」, および, 「東北大学の高大連携活動」に関する項目から成る. 以上, 本稿末の資料を参照のこと.

3. 調査対象校

東北大学の入学者選抜に関する資料を送付している高等学校(計2,023校)を調査対象とした. 東北地方の全ての高等学校, 全国の国立高等学校, および, 過去5年間に東北大学への志願者を輩出した高等学校である. ただし, 特殊教育諸学校を除く.

4. 調査方法

調査票は平成15(2003)年11月末に郵送した. 担当者が必要事項を記入, 平成15(2003)年12月中旬までに返送を求めた. 記入担当者は指定せず, 「東北大学の入試についてよくご存知の先生」を選ぶよう求めた.

5. 集計方法

集計方法として, 3通りの方法を用いた.

まず, 普通の単純集計である. 単純集計の場合, 単位は学校である.

残り二つは, 東北大学の受験者, および, 入学者層を伺わせる方法を考えた. 受験者の様相を見るため, 学校ごとに過去5年間の志願者数(ただし, 電算処理されている入試区分⁸⁾のみ)で重み付けをした. 概ね「東北大学を志願する受験生の母集団」の実態把握が可能と考えた. さらに, 同様の方法で合格者数を用いた. 概ね「東北大学に入学する学生の母集団」の実態把握が可能と考えた. なお, 前者を「志願者数重みによる集計」(以下, 必要に応じて「志願者」と略記す

る), 後者を「合格者数重みによる集計」(以下, 必要に応じて「合格者」と略記する)と呼ぶ。

結果

1. 回収率

1. 1. 単純集計

調査対象2,023校のうち, 1,353校から回答が寄せられた。回収率66.9%である。調査設計の段階で, 学校名を伏せるかどうか, 回収率との兼ね合いが難しい判断であった。学校名の記入を求めたことによって回収率にダメージを受けることは無かったと言える。むしろ, 学校名の情報から, 志願者数, 合格者数の重み付けも可能となった。

都道府県別では, 90%以上の高い回収率が佐賀県(100%), 栃木県(97.0%), 富山県(90.0%), 逆に, 50%未満の低い回収率が大阪府(44.4%), 京都府(49.0%)であった。東北地方では, 回収率が高い順に宮城県(80.7%), 青森県(79.3%), 秋田県(74.6%), 山形県(72.7%), 岩手県(67.7%), 福島県(59.3%)であった。

1. 2. 重み付き集計

志願者, 合格者の重み付き集計における「カバー率」を定義する。カバー率とは, 回答を寄せた学校からの志願者数(または, 合格者数)合計の全体に対する比率を表す。重み付き集計では, 多くの志願者(または, 合格者)を東北大学に送っている学校の回答が大きな影響を及ぼす。例えば, 志願者の場合, 上位3校のカバー率が9.8ポイント⁹⁾, 合格者の場合は9.1ポイントである。その意味では, 解釈には注意が必要である。なお, 回答を寄せた高校のうち, 213校が過去5年間の志願者数0であり, 569校が合格者数0であった。重み付き集計では, これらの学校が除外される。志願者のカバー率は86.5%, 合格者のカバー率は87.5%と高い数値となった。

なお, 過去5年間で100名以上の合格者を輩出している22校中未回答は1校, 合格者数で上位100校(過去5年間で合格者数合計26名以上)のうち, 未回答は9校であった。

以上のことから, 本調査は, 東北大学の受験生, 学生を輩出する高校の実態を十分に反映したものと言える。

2. 新学習指導要領の下での高校教育

新教育課程の下での教育に対する回答結果を表1に示す。

2. 1. 授業時間

単純集計結果から見ると1コマあたりの授業時間は73.3%が50分授業であった。また, 55分未満が87.0%, 最も短いケースは40分であった。50分未満という回答のほとんどは45分授業である。逆に, 「65分」という授業時間の学校も6.0%見られた。

重み付き集計では, 65分授業の割合が高くなり, 志願者で約17ポイント, 合格者で約19ポイントに上る。一方, 「50分未満」の割合も高く, 標準的な50分授業が少ない(志願者で約41ポイント, 合格者で約40ポイント)。

2. 2. 総合的な学習の時間

約半数の学校が「進路学習」(45.0%)に当てており, これに「テーマ学習」(34.5%)を加えると約8割が当てはまる。重み付き集計では, さらに「進路学習」の割合が大きく, 60ポイント近くに上る。逆に, 「テーマ学習」は全体の1/4程度である。

「スーパー・サイエンス・ハイスクール(SSH)等の活動」は非常に少ない(0.9%)ものの, 重み付き集計では2ポイントを超える。ちなみに, 調査時点でSSHの指定を受けていた高校は全国で52校に上るが, そのうち51校が調査対象校であった。その中で調査に回答を寄せた学校が45校(回収率88%), 回答校全体に占める割合は単純集計では7.4%(志願者で約10ポイント, 合格者で約12ポイント)であった。

「教科の補習」は3.5%と少なく, 重み付き集計の場合には, さらに少なくなっている(志願者重みで約2ポイント, 合格者重みで約1ポイント)。「学校行事」に充当する割合も比較的低い(単純集計で5.6%)。

「進路学習」, 「テーマ学習」のいずれにも該当しないような「体験学習」も「その他」のカテゴリーの具体的な記述の中から散見されたが, 重み付き集計では登場しない。「体験学習」以外で「その他」に該当する回答の記述には, 「未定」, 「検討中」, 「読書」, 「小論文指導」などが目立った。

2. 3. 情報

単純集計ではコンピュータ操作体験が中心の「情報

表 1. 新教育課程の下でのカリキュラム

授業1コマの時間

	50分未満	50～54分	55～59分	60～64分	65～69分	70分以上
単純集計	13.6%	73.4%	4.5%	0.7%	6.1%	1.8%
志願者重み集計	24.3%	40.8%	13.7%	1.5%	17.0%	2.7%
合格者重み集計	21.2%	40.1%	16.2%	1.4%	18.9%	2.2%

「総合的な学習の時間」の活用法

	進路学習	テーマ学習	SSH	補習	行事	体験学習	その他
単純集計	45.0%	34.6%	0.9%	3.5%	5.6%	0.8%	9.6%
志願者重み集計	58.1%	24.8%	2.4%	1.5%	4.5%	0.0%	8.7%
合格者重み集計	58.1%	24.8%	2.7%	1.3%	4.0%	0.0%	9.1%

「情報」の履修内容

	情報A	情報B	情報C	読み替え	情報処理*	その他	未検討
単純集計	64.1%	10.8%	9.7%	8.4%	1.7%	4.9%	0.3%
志願者重み集計	46.1%	11.0%	16.3%	11.5%	0.3%	14.8%	0.1%
合格者重み集計	46.5%	11.2%	15.6%	11.5%	0.3%	14.9%	0.1%

「理科」の選択必修科目

	理科基礎	総合A	総合B	AB選択	AB両方	その他	読み替え
単純集計	9.7%	53.4%	16.1%	9.5%	7.1%	2.2%	2.0%
志願者重み集計	12.5%	45.9%	23.8%	9.6%	5.2%	1.6%	1.5%
合格者重み集計	12.7%	48.9%	21.0%	8.5%	5.7%	1.8%	1.5%

「理科Ⅱ」の選択単元

	全て	選択	開講なし	一方のみ	科目による	検討中	その他
単純集計	31.2%	29.8%	9.5%	1.5%	5.5%	19.7%	2.9%
志願者重み集計	53.0%	19.9%	0.7%	0.2%	2.7%	19.4%	4.2%
合格者重み集計	54.1%	18.4%	0.6%	0.2%	2.9%	18.6%	5.2%

*：専門教育における情報関連科目。工業科の「情報技術基礎」、商業科の「情報処理」等。

A」が64.1%を占めた。ただし、志願者、合格者では、やや少なく（約46ポイント、約47ポイント）、代わりに「読み替え」（それぞれ約11.5ポイント）、「その他」（それぞれ約15ポイント）の割合が大きくなっている。

専門高校では、「その他」として専門教育の科目で代替するところが多い。それ以外の「その他」の回答は、「未実施」、「検討中」、「課程によって選択する科目を変える」、「スーパー・サイエンス・ハイスクール の活動の中に組み入れる」等が目立った。

2. 4. 理科の必修選択

約半数（53.4%）の学校は「理科総合A」を履修すると回答したが、重み付き集計結果ではやや下がる（志願者で約46ポイント、合格者で約49ポイント）。「基礎理科」（単純集計9.7%、志願者12.5ポイント、合格者12.7ポイント）、「総合理科B」（単純集計16.1%、志願者23.8ポイント、合格者21.0ポイント）は少数だが、重み付け集計では若干上がる。「A、Bいずれかの選択」はどの集計でも10%弱であった。

この質問項目は、選択肢だけでは回答の多くを拾いきれず、「その他」に分類された中から「A、B両方履修」（単純集計7.1%、志願者5.2ポイント、合格者5.7ポイント）、他科目での「読み替え」（単純集計2.0%、志願者1.5ポイント、合格者1.5ポイント）も一定数見られた。

なお、この質問項目に対しては補足説明が多かった。「化学等の個別科目の「I」の分野の内容を履修させる」、「旧理科Iの内容を実施する」、「『I』に当たる範囲を3（ないしは4）科目学ばせる」など、学校独自の工夫が多く見られ、確実な実態把握は難しい。

2. 5. 理科「Ⅱ」科目の選択単元

大学入試の実務を考える上で極めて重要な項目の一つと考えていたが、質問の意図通りの回答を得ることは困難であった。

「全ての単元を履修させる」との回答は、単純集計では31.2%であったが、重み付け集計では半数を超えた（志願者53.0ポイント、合格者54.1ポイント）。「生

徒の関心によって選択させる」という回答は単純集計ではそれに匹敵する29.8%と言う高率だったが、重み付け集計では2割程度である（志願者19.9ポイント、合格者18.4ポイント）。しかし、この回答に関しては数値を額面どおり受け取ることが出来ない事情がある。そもそも、「生徒の関心によって選択」という対応が可能なほど体制が整った高校は多くはないはずである。この選択肢を選んだ回答者の大半は、従来通りの理科の教科内における「科目選択」に関わる質問と勘違いしたケースがほとんどと推測できる。実際、この選択肢に補足説明を付した回答は、ほぼ例外なく「単元」選択ではなく、「科目」選択に関わる記述を行っていた。

さらに、「Ⅱ」の科目は、通常3年生での履修となるが、20%弱（単純集計19.8%、重み付き集計でそれぞれ約19ポイント）の高校が「検討中」と回答した。

なお、10%近くの学校が「Ⅱ」の科目を開講していないと答えたが、東北大学に志願者・合格者を送り出している高校に限定すると極めて稀である。

2. 6. 新学習指導要領の下での心配

用意した16の選択肢のうち、「保護者との関係」、「同窓会との関係」、「対外関係」はほとんど、あるいは、全く選択されなかったため省略する。

結果を図1に示す。重み付き集計で見た場合には、「高校入学時の学力不足」は90%近くが心配と答えて

いる。これは、学習指導要領の改訂の小中学校への影響を懸念した回答であろう。

さらに、「授業時間の不足」、「家庭学習の不足」、「反復学習の不足」といった、学習関連の環境要因に関して半分ほどが心配だと回答した。また、「主体性の低下」、「卒業時の学力不足」、「学習内容の過密化」、「学習意欲の低下」も心配な事項として挙げられている。一方、「教員の実働時間増」が重みつき集計で30%を超えている以外には、学習面以外の影響に対する懸念は大きくない。

3. 東北大学の入試について

3. 1. 東北大学の入試の影響

単純集計を見る限り、東北大学の入試が高校の教育に影響する程度はさほど大きなものではない（「ある程度」、「かなり」合わせて15.5%）。しかし、重み付き集計では数値が劇的に跳ね上がる（「ある程度」、「かなり」合わせて志願者重みで約58ポイント、合格者重みで約60ポイント、以上、表2参照）。これらの結果を勘案すると、学校数では高校教育への影響は広範とは言えないが、東北大学に学生を輩出する学校に対する影響は大きい。

3. 2. 各学部の入試

東北大学の入試が教育に「影響あり」と回答した高校に、各学部の入試の改善点の有無を尋ねた。条件⁽¹⁰⁾

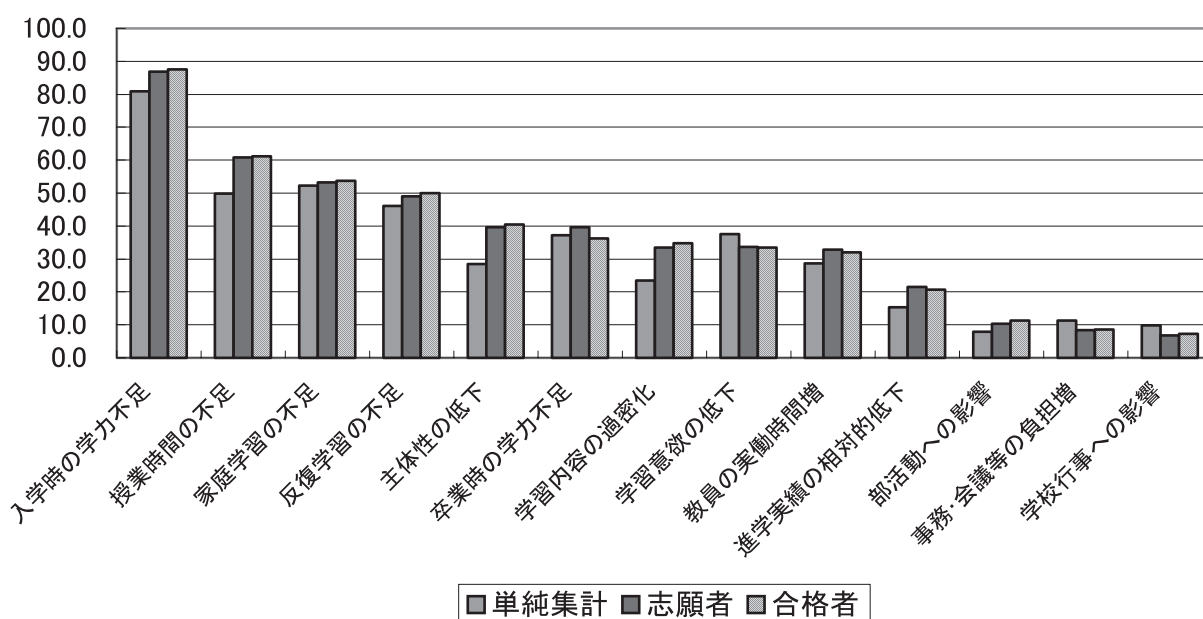


図1. 新教育課程における心配

表2. 東北大学の入試に関する意見

東北大学の入試が高校教育に与える影響

	全くない	あまりない	どちらとも言えない	ある程度ある	かなりある
単純集計	17.6%	42.6%	24.2%	11.7%	3.9%
志願者重み集計	4.7%	19.1%	17.8%	21.2%	37.1%
合格者重み集計	5.1%	18.3%	16.3%	23.3%	36.9%

「改善すべき」という意見の割合

	文	教	法	経	理	医	保健	歯	薬	工	農
単純集計 (全体)*	8%	7%	8%	6%	5%	6%	9%	5%	5%	6%	3%
単純集計	12%	10%	12%	11%	6%	9%	12%	6%	7%	6%	4%
志願者重み (全体)*	24%	19%	14%	9%	10%	17%	23%	10%	6%	4%	4%
志願者重み集計	26%	21%	15%	9%	11%	18%	25%	11%	6%	4%	4%
合格者重み (全体)*	21%	16%	14%	8%	11%	13%	20%	9%	4%	4%	4%
合格者重み集計	23%	18%	14%	9%	12%	14%	22%	10%	4%	4%	2%

*：「直前の質問に4, 5と回答した場合のみ」という条件に関わらず、回答があったものを全て集計

に該当しないケースも含めた単純集計では、全ての学部で「問題ない」が90%を超えていた。しかし、条件、重みを加えていくと、学部ごとに様相が違ってきた。

「改善すべき」という回答が増えたのは「文学部」、
「医学部保健学科」、
「教育学部」、
「医学部医学科」(20ポイント以上の場合がある)、
「法学部」、
「理学部」、
「歯学部」の順である(10ポイント以上の場合がある)。

以下、「東北大学の入試がかなり影響する」との回答から、目についた改善意見を挙げる。

文系4学部に対しては、基本的に各学部共通の意見が多かった。例えば、「センターにおける公民の指定科目は3科目から選択可にして欲しい」、「AO、推薦制度を導入して欲しい」、「個別試験に地歴の出題を」、「後期の小論文の出題形式に一考を」、「センター試験の配点が高い」、「AOⅡ期・推薦Ⅰの出願時期を検討して欲しい」といった意見である。

理系6学部(7学科)については意見がばらつく傾向が見られたが、一部には複数学部に共通の意見もある。

理学部に対しては「理科の科目の難易差が大きすぎる」、「AOⅡ期の出願基準(評定)を工学部の様に弾力的に」といった意見が寄せられた。

医学部医学科に対しては「理科3科目受験については慎重に検討して欲しい(他学部にも共通の要望)」、「個別試験の数学が4問では不足ではないか(他学部にも共通の場合あり)」、「AO、推薦制度を導入して欲しい」といった意見が寄せられた。

医学部保健学科に対しては「個別試験の負担が重

い」、「理系しか対応できない」といった意見が、一致して数多く寄せられた。「AO、推薦制度を導入して欲しい」といった意見も見られた。

歯学部に対しては、「センターの配点が高い」という意見があった。

薬学部に対しては、「個別試験の理科で生物も選択可として欲しい」という意見が寄せられた。

工学部に対しては、「英語の配点を高くして欲しい」という意見があった。

農学部に対しては、「学科別募集にしてはどうか」という意見があった。

いずれにせよ、各学部とも現状の入試に対して「問題ない」との意見が多数派である。また、一部を除き、多くの高校から同じような意見が寄せられるケースは稀であったことも付言しておく。

4. 高大連携活動について

本項では東北大学の高大連携活動、入試広報活動に対する認知状況について述べる。表3に集計結果を示す。

最初に留意しておきたいのは、高校の中の情報伝達が円滑ではない状況も疑われることである。例えば、頻繁に訪問し、活発に交流している高校から「東北大学の教官の訪問はない」と回答してきたケースもあった。したがって、調査結果は過小評価の可能性がある。

4. 1. オープンキャンパス

東北大学のオープンキャンパスは毎年7月末に2日間実施されている。年々規模が大きくなり、今年度(平

表3. 東北大学の高大連携活動

オープンキャンパス

	学校として参加	生徒に参加を促した	何もしていない
単純集計	6.0%	34.6%	59.4%
志願者重み集計	28.8%	51.1%	20.1%
合格者重み集計	31.8%	48.8%	19.4%

出前授業

	実施したことがある	依頼したが実現せず	何もしていない
単純集計	3.9%	0.2%	96.0%
志願者重み集計	28.7%	0.3%	71.0%
合格者重み集計	30.7%	0.4%	68.9%

キャンパス訪問

	学校として実施	生徒に訪問を促した	何もしていない
単純集計	4.1%	23.0%	72.9%
志願者重み集計	13.7%	47.0%	39.3%
合格者重み集計	15.7%	43.6%	40.7%

東北大学紹介ビデオ

	生徒に紹介	学校にはある	存在は知っている	知らない
単純集計	3.3%	9.5%	28.9%	58.3%
志願者重み集計	18.4%	24.4%	28.5%	28.7%
合格者重み集計	16.8%	27.3%	28.3%	27.6%

東北大学教官の高校訪問

	毎年ある	まれにある	全くない	把握していない
単純集計	1.8%	5.9%	65.7%	26.7%
志願者重み集計	24.9%	23.5%	38.6%	13.1%
合格者重み集計	23.2%	26.6%	36.7%	13.4%

東北大学の入試説明会

	毎年参加	参加したことがある	参加したことはない
単純集計	7.2%	11.8%	81.0%
志願者重み集計	45.1%	13.2%	41.7%
合格者重み集計	43.8%	13.8%	42.5%

成17〔2005〕年度)には、把握されている限り、延べ約19,000名の参加者があった。前年比約1,000名増、6年間で約3.0倍という急成長ぶりである。

毎年実施している新入学者アンケートの結果によれば、大学全体で30%以上がオープンキャンパスを経験した上で入学していることが分かっている。また、オープンキャンパスを訪れた者のうち、進路の「決め手になった」、「参考になった」としている割合は80%にも上る¹⁷⁾。

「学校として参加」している高校は単純集計では6.0%であったが、志願者、合格者では30ポイント近くになった。また、「何もしていない」という高校は単純集計で60%に及ぶ一方、重み付き集計では20ポイント程度である。

4. 2. 東北大学の講師による出前授業

東北大学では、出前授業、キャンパス訪問等の依頼に対して、入試課を窓口にして受け付けている。平成16(2004)年度の実績¹¹⁾では、出前授業は、41校に対して延べ105名の講師を派遣した。部局に直接行われた依頼、教員個人への依頼は把握できていないので、実際に行われた活動は以上の数値を超えたものだと考えられる。

全体では4%弱の高校が東北大学からの出前授業を経験している。重み付き集計では約30ポイント程度に達する。なお、「依頼したが実現しなかった」ケースはほとんどない。大学としての努力が現れた結果だと思われる。

4. 3. キャンパス訪問

平成16(2004)年度実績では、キャンパス訪問については12校から延べ621名の訪問者を受け入れた。部局への直接の依頼、教員個人への依頼等は把握できていないので、実際に行われた活動は以上の数値を超えたものであると考えられる。

全体では4%強の高校が東北大学へのキャンパス訪問を「実施したことがある」と回答した。重み付き集計ではそれが約14～15ポイントに達する。出前授業ほど大きな数値にならないのは、オープンキャンパスが有効に利用されていることによるのかもしれない。

4. 4. 東北大学紹介ビデオ

平成14(2002)年度、東北大学紹介ビデオが製作された。全学版、各学部版がある。全学版は、平成15(2003)年度に改訂された。CD、および、ストリーミング配信の形で提供されていた⁽¹²⁾。オープンキャンパス、出前授業等の大学疑似体験の試みは、高校生が東北大学を実際に体感するためには極めて重要な広報活動である。しかし、アクセス、キャパシティの問題から、無限に拡大していくことは出来ない。その点、ビデオは、アップデートしなければ情報が古くなるという問題はあるが、広範に情報を伝えるには有効である。

単純集計によれば、4割ほどに知られている。重み付き集計によれば、存在自体の認知度は70ポイント以上に上る。

4. 5. 東北大学教員の高校訪問

平成16(2004)年度実績では、公式に残っているだけで、アドミッションセンター⁽¹³⁾専任教員3名が37校を訪れた。記録に残らない訪問活動もある。また、部局や教員個人の活動は把握されていないので、実際には極めて活発に高校訪問が行われているものと考えられる。

単純集計では「毎年ある」、「まれにある」を合わせて7.7%程度であるが、実数では、101校に上る。さらに、重み付き集計の場合、その値は50ポイント近くに跳ね上がる。

4. 6. 東北大の入試説明会

大学としての入試説明会は、大学独自のものと同民間会社主催で他大学と共同のものがある。平成16(2004)年度、大学独自の進路指導担当者向け説明会は延べ

15回(参加者数263名)、他大学と共同の説明会は延べ15回行われた。

単純集計では2割程度の高校にしか行き渡っていない。しかし、重み付き集計では、40ポイント以上の高校が「毎年参加」している。参加したことがない高校は、40ポイント強に過ぎない。

5. 新教育課程における「心配」、東北大学の入試の「影響」と諸項目の関係

本節では、新教育課程において高校教員が抱えている「心配」、および、東北大学が高校に与える「影響」に関する認知と、それ以外の諸項目との相関関係について分析を行う。

5. 1. 新教育課程における心配の尺度化

最初に「新教育課程における心配」について尺度化を試みた。2値データの因子分析は、そのままでは「困難度」の因子が抽出される可能性がある¹⁸⁾など、問題がある。したがって、本研究で行った主成分分析は、尺度化の目安を立てるだけのものである。

まず、図1の13項目について主成分分析を行った。第1主成分が2.16、第2主成分が1.63、累積寄与率が29%と十分な値とは言えないが、解釈可能性を考慮して、回転後の布置から2つの尺度を抽出することとした。

結果を表4に示す。第1軸、または、第2軸の値が、3以上であることを目安に分類し、「卒業時の学力不足」以外から6項目ずつの2つの尺度を構成すること

表4. 「新教育課程における心配」の尺度化

	項 目	第1主成分	第2主成分
心 学 習 面 の 尺 度	1. 入学時の学力不足	0.325	0.001
	2. 学習意欲の低下	0.630	-0.040
	3. 反復学習の不足	0.496	-0.008
	4. 主体性の低下	0.658	0.056
	5. 家庭学習の不足	0.678	-0.031
	9. 進学実績の相対的低下	0.423	0.228
学 校 運 営 面 の 尺 度	6. 授業時間の不足	-0.017	0.400
	7. 学習内容の過密化	0.035	0.361
	10. 部活動への影響	-0.004	0.640
	11. 学校行事への影響	-0.153	0.629
	15. 事務・会議等の負担増	0.213	0.487
	16. 教員の労働時間増	0.165	0.606
	8. 卒業時の学力不足	0.276	0.193

とした。まず、「1. 入学時の学力不足」、「2. 学習意欲の低下」、「3. 反復学習の不足」、「4. 主体性の低下」、「5. 家庭学習の不足」、「9. 進学実績の相対的低下」を「学習面の心配尺度」とする。さらに、「6. 授業時間の不足」、「7. 学習内容の過密化」、「10. 部活動への影響」、「11. 学校行事への影響」、「15. 事務・会議等の負担増」、「16. 教員の実働時間増」を「学校運営面の心配尺度」とする。内部一貫性を表す信頼性指標のアルファ係数は、前者が0.56、後者が0.47で、あまり高くはない。なお、双方の尺度の相関係数は0.12であり、非常に弱い正の相関が見られた。信頼性の不十分さによる相関係数の希薄化を考慮に入れたとしても⁽¹⁴⁾ 独立とまでは言えないが、とりあえず、2つの尺度はそれぞれ別の側面を測定していると言ってよいであろう。

5. 2. 「新教育課程における心配」、「東北大学の入試の影響」と諸要因

「学習面の心配尺度」と「東北大学の入試の影響」との相関係数は0.06、「学校運営面の心配尺度」と「東北大学の入試の影響」との相関係数も0.06であった。

各学部の入試に対する改善意見との関係は表5に示す。相関係数の値が高いほど、「『尺度得点が高い』ほど『改善すべき』という意見が多い」という傾向が強いとすることが言える。東北大学の入試の影響との関連は直前の質問で「影響がある（4、または、5）」と回答した高校に限定して分析した。したがって、「新教育課程における心配」との相関係数は点双列相関係数であるが、「東北大学の入試の影響」とは四分点相関係数である。

医学部保健学科、歯学部を除き、「東北大学の入試が自校の教育に影響する」との認識の強さと「改善すべき」という意見との関連は見られなかった。

「新教育課程の下での心配」に関しても、「文学部」と「学校運営面の心配」に弱い相関が見られた程度である。

東北大学の高大連携活動との関係は表6に示したとおりである。相関係数が負で絶対値が大きいほど、「『尺度得点が高い』ほど各活動への認知度が高い」という傾向が強い。

全ての活動において「東北大学の入試が自校の教育

表5. 「新教育課程における心配」、「東北大学の入試の影響」と各学部の入試への意見の相関係数

	学習面の心配	学校運営面の心配	東北大学入試の影響
文学部	0.025	0.115*	0.095
教育学部	-0.049	0.070	0.062
法学部	0.016	0.068	0.080
経済学部	0.018	0.072	0.035
理学部	-0.040	-0.005	0.140
医学部医学科	-0.024	0.082	0.040
医学部保健学科	0.034	0.040	0.153*
歯学部	-0.030	0.015	0.146*
薬学部	-0.026	0.032	0.031
工学部	-0.013	0.015	0.009
農学部	-0.018	-0.011	0.076

*: p < .05

表6. 「新教育課程における心配」、「東北大学の入試の影響」と高大連携活動

	学習面の心配	学校運営面の心配	東北大学入試の影響
オープンキャンパス	-0.079**	-0.023	-0.418***
出前授業	-0.102***	-0.056*	-0.274***
キャンパス訪問	-0.065*	-0.055*	-0.290***
東北大紹介ビデオ	-0.108***	-0.068*	-0.308***
東北大教官の訪問	-0.101***	-0.014	-0.252***
入試説明会	-0.108***	-0.022	-0.352***

*: p < .05, **: p < .01, ***: p < .001

に影響する」と考える高校からの認知度が高い。高校側の東北大学の情報へのアクセス努力がうかがえるとともに、本学の高大連携活動が適切なターゲットに向けられていることが示された結果とも言える。

「学習面の心配」が大きい高校ほど、東北大学の高大連携活動への認識が高いことが分かった。「学校運営面での心配」とは関係が無い。

考察

志願者、合格者の2つの重み付き集計は概ね似たような傾向を示していたので、志願者の母集団と合格者の母集団を異なったものとする必要性はない。

新教育課程の下で、時間的、労力的な制約が厳しい中、高等学校が忠実に学習指導要領の理念を実践しようと腐心している様子が見て取れる。

授業時間については、従来の標準時間通りが多かった。重み付き集計では授業時間が長い高校もあったが、大学の授業のような長時間のコマを原則とする極

端なケースは見当たらない。「総合的な学習の時間」の利用については、多くの学校が「各学校は、地域や学校、生徒の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うものとする」という文部科学省の方針¹²⁾を生かそうと苦勞している。特に、東北大学に志願者・合格者を多く輩出する高校では「教科等の補習」ではなく、「進路学習」にその時間を当てる傾向が強い。高校は決して受験勉強だけに教育活動を割いているわけではない。「新教育課程における心配」の中にも見られた通り、絶対的な時間不足の中、生徒に自分の将来を考えさせる取り組みを必死に行っている様子である。ここからも、高校生の進路に係る大学情報の提供、様々な形態の大学疑似体験の受け入れ等、高校の教育活動に大学が協力することが求められている。逆に言えば、大学側にとっては絶好の入試広報の機会と捉えることも出来る。

一方、研究中心大学である東北大学の全体の営みを考えると、際限なく高校の活動に協力できる訳ではないことも、理解を求める必要があるだろう。今後、高校との間でさらに緊密な連携関係、信頼関係を構築していく必要性を示唆する結果である。

「情報」、「理科」については、調査時点では多くの高校で体制整備が完了していなかった。特に「理科」の問題は、担当教員以外の理解が不十分だったのだろう。年度が進行し、現在はどのような形で運営されているか定かではないが、新教育課程初年度が事実上の手探り状態で始まっていた様子が想像できる。単位数が削減傾向の中、「総合的な学習の時間」、「情報」といった、自由度の大きな枠が加わり、「理科」の選択必修や選択単元をどうするかといった課題も高校に突きつけられている。従来以上に高校の「カリキュラム立案能力」が試される事態となっている。

入試が高校教育に与える影響に関しては、「全般に広く」ではなく「当事者に対して大きな影響力」を持っていることが示唆された。そういった意味では、各学部の入試が比較的好意的に捉えられていたことは喜ばしい。また、「改善すべき」として挙げられていた意見に対しても、現在進行中の入試改革で結果的に解決済み、あるいは問題点解消の方向に動いているケース

が多く見られる。円滑な教育接続を視野に入れ、可能な範囲で高校の要望に応える姿勢を今後も続けていくことが、大学としての課題であろう。

入試広報活動は社会的評価が高いただけあって十分な成果を挙げていることが示された。将来の学生に向けて活動が行われ、情報が届けられていることがデータで示されたことが収穫である。今後も近視眼的発想に陥ることなく、直面する様々な課題について「東北大学と高校の教育接続と連携」の広い視野からの取り組みが求められる。

注

- (1) 本稿は、平成15年度教育研究共同プロジェクト（東北大学総長裁量経費）「新学習指導要領の下での高等学校のカリキュラムに関する実地調査」、および、平成13～15年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「高大連携システム構築のための基礎研究－主として高校生向け大学体験講座を対象に－」（研究代表者：鈴木敏明）に関連して収集したデータを基に分析したものである。それぞれの研究の概要については、文献1)、2)を参照のこと。なお、本研究の一部のデータの分析結果については、日本高等教育学会第7回大会にて発表を行っている³⁾。
- (2) 中等教育学校を含む。以下、同じ。
- (3) 毎年発行される朝日新聞社刊「大学ランキング」には、「高校からの評価」の分野があり、東北大学は常に上位に位置している。ちなみに、同書2006年度版⁷⁾では、「広報に熱心な大学」ランキングで第3位（国立大学ではトップ）、「総合評価」で第1位にランクされている。
- (4) この節は主に文献8)の一部を加筆修正したものである。
- (5) 卒業単位数は昭和57(1982)年の施行の教育課程までは85単位であったが、それから現在までは80単位に減り、学校完全週5日制の導入される平成15(2003)年の新教育課程では74単位にまで減らされる。必修単位数もピークであった昭和45(1970)年当時の68単位から38単位にまで減り、平成15(2003)年度からは31単位にまで減少した¹⁰⁾。
- (6) すなわち、「物理ⅠA」と「物理ⅠB」といった、同

じ区分の科目2科目の選択は許されない。

- (7) 医学部については入試区分と方法が異なる「医学科」と「保健学科」をそれぞれ別個に扱うこととした。
- (8) 具体的には、「一般入試（前期，後期）」、「AO入試Ⅲ期」，「推薦入学Ⅱ」の入試区分が含まれる。
- (9) 以下，単純集計における全体に対する百分率の表示を「%」，重み付き集計の場合を「ポイント」と表記する。
- (10) 直前の質問（東北大学の入試の影響）に「4. ある程度影響がある」，または「5. かなり影響がある」と回答した場合のみ，この質問にも回答を求めた。
- (11) 数値は入試課作成の資料による。平成16（2004）年10月31日現在の状況で，一部，予定を含む。
- (12) 現在は古くなって実態と合わない部分が大きくなり，頒布していない。
- (13) 当時。脚注7参照。
- (14) 算出されたアルファ信頼性係数を用いて希薄化を修正すると，真の値の相関係数は.23であった。

文献

- 1) 鈴木敏明・夏目達也・倉元直樹. 新学習指導要領の下での高等学校のカリキュラムに関する実地調査，平成15年度東北大学教育研究共同プロジェクト（総長裁量経費），研究代表者 鈴木敏明，研究成果報告書. 2004.
- 2) 鈴木敏明・夏目達也・倉元直樹. 「教育課程の改訂および東北大学の入試に関する調査」集計結果について. 白川友紀編. 中等教育の多様化に柔軟に対応できる高大接続のための新しい大学入試に関する実地研究，平成15年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究 [A]），研究課題番号15203031，研究代表者 白川友紀，中間報告書. 2004. 17 - 24.
- 3) 倉元直樹. 新学習指導要領の下での高等学校の教育内容について - 大学入試との関連から -. 日本高等教育学会第7回大会発表要旨集録，2004；156 - 157.
- 4) 倉元直樹・森田康夫. 高校と大学をつなぐ入試問題設計のための開発研究. 大学入試研究ジャーナル. 2004；14：31 - 36.
- 5) 木村拓也・倉元直樹. 戦後大学入学者選抜における原理原則の変遷 - 『大学入学者選抜実施要項』「第1項 選抜方法」の変遷を中心に -. 大学入試研究ジャーナル. 2006；16：印刷中.
- 6) トロウ，M. . アメリカ中等教育の構造変動. J. カラベル/A. H. ハルゼー編（潮木守一・天野郁夫・藤田英典編訳）. 教育と構造変動（下）. 東京：東京大学出版会；1980. 19 - 42.
- 7) 2006年版大学ランキング. 朝日新聞社.
- 8) 倉元直樹・小川瑞穂・森田康夫・関川準之助・奈良昌孝・高屋敷一博. 高校と大学の教育接続を重視した試験問題研究. 夏目達也編. 高校と大学のアーティキュレーションに寄与する新しい大学入試についての実践的研究. 平成12年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究 [A]），研究課題番号12301014，研究代表者 夏目達也，中間報告書；2001. 110 - 160.
- 9) 文部省. 学制百二十年史：ぎょうせい；1992.
- 10) 荒井克弘. 高校教育と大学教育との接続. 荒井克弘編. 学生は高校で何を学んでくるか. 大学入試センター研究開発部共同研究報告書；2000. 1 - 23.
- 11) 文部省. 高等学校学習指導要領（平成元年3月）. 東京：大蔵省印刷局；1989.
- 12) 文部省. 高等学校学習指導要領（平成11年3月）東京：大蔵省印刷局；1999.
- 13) 文部省. 高等学校学習指導要領解説 総則編. 京都：東山書房；1999.
- 14) 中央教育審議会. 21世紀を展望したわが国の教育の在り方について（第1次答申）. 1996.
- 15) 教育課程審議会. 幼稚園，小学校，中学校，高等学校，盲学校，聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について（答申）. 1996.
- 16) 文部省. 高等学校学習指導要領解説 情報編. 東京：開隆堂；2000.
- 17) 倉元直樹・鈴木敏明・夏目達也. 東北大学新生に対するAO入試・オープンキャンパスアンケート（第3報）. 夏目達也編. 高校と大学のアーティキュレーションに寄与する新しい大学入試についての実践的研究. 平成13年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（A）），研究課題番号12301014，研究代表者 夏目達也，研究成果報告書；2003. 176 - 184.
- 18) コムリー，A. L. 因子分析入門. 東京：サイエンス社；1979.

資料

教育課程の改訂および東北大学の入試に関する調査

学校名 _____

東北大学の入試改善に関する検討資料の一部として利用したいと思いますので、平成 15 年度からの学習指導要領の下での貴校のカリキュラムについて、以下の質問にお答えください。

- (1) 原則的に、1 校時 (1 コマ) 何分授業を実施されていますか。 _____ 分
- (2) 「総合的な学習の時間」を主としてどのように活用なさっていますか。以下の中から、当てはまるものを **1 つだけ** 選び、番号に○をつけてください。
1. 進路学習等 2. テーマ学習等 3. スーパー・サイエンス・ハイスクール等の活動
4. 教科の補習等 5. 学校行事等 6. その他 (具体的に _____)
- (3) 新教科「情報」については、主としてどの内容を中心に履修させていますか。以下の中から、最もよく当てはまるものを **1 つだけ** 選び、番号に○をつけてください。
1. 情報 A (実習中心) 2. 情報 B (情報技術) 3. 情報 C (情報社会)
4. 他の教科で読み替え 5. その他 (具体的に _____)
- (4) 「理科」の必修科目については、主としてどの内容を中心に履修させていますか。以下の中から、最もよく当てはまるものを **1 つだけ** 選び、番号に○をつけてください。
1. 理科基礎 2. 理科総合 A 3. 理科総合 B 4. 理科総合 A と理科総合 B の選択
5. その他 (具体的に _____)
- (5) 理科の「Ⅱ」科目を履修する生徒に対し、選択単元をどのように履修させる予定ですか。以下の中から、最もよく当てはまるものを **1 つだけ** 選び、番号に○をつけてください。
1. 全て履修させる 2. 生徒の関心によって選択 3. 「Ⅱ」の科目を開講していない
4. いずれか一方のみ (具体的に _____)
5. 科目によって異なる (具体的に _____)
6. 検討中 7. その他 (具体的に _____)

新しい学習指導要領の下での教育に関して、特に心配していることが何かありますか。もしあれば、以下の中から当てはまるものを **いくつでも** 選び、番号に○をつけてください。

1. 高校入学時の学力不足 2. 学習意欲の低下 3. 反復学習の不足 4. 主体性の低下
5. 家庭学習の不足 6. 授業時間の不足 7. 学習内容の過密化 8. 高校卒業時の学力不足
9. 自校の進学実績の相対的な低下 10. 部活動への影響 11. 学校行事への影響
12. 保護者との関係 13. 同窓会との関係 14. 対外関係 15. 事務・会議等の負担増
16. 教員の実働時間の増加 17. その他 (具体的に _____)

(裏面もご記入ください)

東北大学の入試について、おうかがいします。以下の質問にお答えください。

(1) 東北大学の入試のあり方は、貴校の教育にとってどの程度の影響があるとお考えでしょうか。以下の中から、最もよく当てはまるものを **1つだけ** 選び、番号に○をつけてください。

1. 全く影響はない 2. あまり影響はない 3. どちらとも言えない
4. ある程度影響がある 5. かなり影響がある

(2) (直前の質問で「4」、または、「5」と御回答の場合、以下の質問にもお答えください。)

現在の東北大学の入試についてどのようにお感じでしょうか。以下の中から、学部ごとに最もよく当てはまるものを **1つだけ** 選び、番号に○をつけてください。なお、お手数ですが、必要があれば本学の選抜要項、募集要項等の入試関連資料をご参照の上、ご回答いただければ幸いです。

- 文学部 1. 問題ない 2. 改善すべき (具体的に _____)
- 教育学部 1. 問題ない 2. 改善すべき (具体的に _____)
- 法学部 1. 問題ない 2. 改善すべき (具体的に _____)
- 経済学部 1. 問題ない 2. 改善すべき (具体的に _____)
- 理学部 1. 問題ない 2. 改善すべき (具体的に _____)
- 医学部医学科 1. 問題ない 2. 改善すべき (具体的に _____)
- 医学部保健学科 1. 問題ない 2. 改善すべき (具体的に _____)
- 歯学部 1. 問題ない 2. 改善すべき (具体的に _____)
- 薬学部 1. 問題ない 2. 改善すべき (具体的に _____)
- 工学部 1. 問題ない 2. 改善すべき (具体的に _____)
- 農学部 1. 問題ない 2. 改善すべき (具体的に _____)

東北大学の高大連携活動への参加状況、利用状況についてお聞きします。**過去5年程度**を念頭に、以下の中から、最もよく当てはまるものを **1つだけ** 選び、番号に○をつけてください。

- オープンキャンパス 1. 学校として参加 2. 生徒に参加を促した 3. 何もしていない
- 東北大の講師による出前授業 1. 実施したことがある 2. 依頼したが実現せず 3. 何もしていない
- キャンパス訪問 1. 学校として実施 2. 生徒に訪問を促した 3. 何もしていない
- 東北大紹介ビデオ 1. 生徒に紹介 2. 学校にはある 3. 存在は知っている 4. 知らない
- 東北大教官の学校訪問 1. 毎年ある 2. まれにある 3. 全くない 4. 把握していない
- 東北大の入試説明会 1. 毎年参加 2. 参加したことがある 3. 参加したことはない

ご協力ありがとうございました。